水滞の病態と治療に関する基礎知識

大阪大谷大学薬学部 漢方医療薬学 教授　谿 忠人

図1 病理の実証（湿証を中心にして）

病理の実証は病邪の過剰や病理産物の停滞（日本漢方の実証は闘病反応の顕著な病態）

気滞（憂鬱感、情緒不安定、胸が苦しい）　→**理気（四逆散、香蘇散）**

血瘀（微小循環不全、打撲、月経不順）　→**活血（桂枝茯苓丸、桃核承気湯）**

湿証【生体の生理的な水（津液）の運行異常や偏在した病態】（局部的に燥証が認められる）

水滞（浮腫、頭痛、嘔気、口渇）　→**利水（苓桂朮甘湯、五苓散、猪苓湯）**

痰飲（胃部停滞感、嘔気、めまい感）　→**化痰（半夏厚朴湯、二陳湯）**

図2 湿証に用いる生薬と処方（水滞を中心にして）

赤字：熱証用生薬　青字：寒証用生薬

水滞（身体が重い、むくみ、嘔気、）		（基本）沢瀉、茯苓、猪苓、朮	五苓散、猪苓湯
風湿・風水	（発熱、口渇、四肢腫脹）	麻黄、朮（＋石膏）	越婢加朮湯
		麻黄＋薏苡仁	麻杏薏甘湯、薏苡仁湯
		黄耆、朮（＋防已）	防已黄耆湯
	（冷え症、四肢腫脹）	朮、附子（＋桂皮）	桂枝加朮附湯
風湿熱	（水疱、膿疱、びらん）	木通、苦参（＋牛蒡子、蝉退）	消風散
肝胆湿熱	（黄疸、口渇、湿疹）	茵陳蒿、山梔子（＋大黄）	茵陳蒿湯（黄連解毒湯）
膀胱湿熱	（排尿痛、残尿感）	山梔子、黄芩、車前子、木通	竜胆瀉肝湯、五淋散

（湿証の痰飲と化痰薬は次回に解説する）

図3 湿証（水滞証と淋証）

赤字：熱証用生薬　青字：寒証用生薬

◎水滞には主に「脾胃と肺と腎」の機能が関与している。

宣肺祛湿（麻黄）＋朮、薏苡仁
麻黄加朮湯
越婢加朮湯
眼瞼、頭面の浮腫、関節痛

清湿熱（茵陳蒿）
茵陳蒿湯
黄疸、便秘

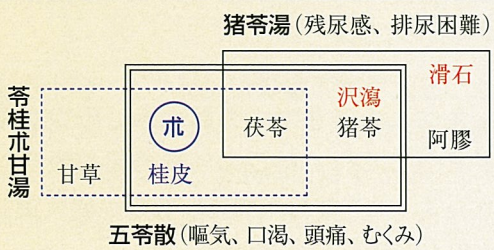
清熱燥湿（山梔子、滑石）
五淋散
竜胆瀉肝湯
下痢、排尿痛

水滞（浮腫・尿量減少）　**湿熱（黄疸）**　**湿熱（淋証）**

頭痛、下肢の浮腫、嘔吐
五苓散
防已黄耆湯
健脾利湿（茯苓、朮、黄耆）

下肢の浮腫、腰冷痛
八味地黄丸
真武湯
温腎利尿（附子、桂皮）

下痢、排尿困難、残尿感
猪苓湯
利水滲湿（猪苓、沢瀉）



五苓散の併用例

ネフローゼに**小柴胡湯**と併用（**柴苓湯**）
（ステロイド剤の節約効果が期待できる）
二日酔いの口渇・頭痛に**黄連解毒湯**と併用
暴飲暴食後の嘔気に**平胃散**と併用（**胃苓湯**）
嘔気に**半夏厚朴湯**と併用

胃腸虚弱者の下痢に**人参湯**と併用

1. 病理の実証(湿証)(図1)

体内の水の流れ：肺・脾・腎の関与が大きいと考えられています。口から入った水の流れには**胃→脾→肺→膀胱**の経路と**胃→腸→膀胱**あるいは排便が関与しています。これらの臓腑の機能に**腎**が寄与しています。

湿(水滞)の用語：**水腫**と**風水**が西洋医学の浮腫に相当します。**湿熱**は炎症を伴う浮腫(皮疹、黄疸、下痢、尿路疾患など)に対応します。**痰飲**は喀痰と消化器系の水滞(胃内停水)を意味します。

水毒

日本漢方では水滞を水毒とし「血液以外の体液が過剰に存在するか、本来ない場所に存在する病態」とされています(今田屋)。

水滞の診断基準(寺澤教授)：13点以上が水滞

15点：浮腫傾向・胃部振水音；胸水・腹水
7点：(関節)の朝のこわばり；尿量減少
5点：めまい感；立ちくらみ、多尿
車酔いしやすい、水瀉性下痢
臍上悸(腹部大動脈の拍動亢進)
4点：拍動性の頭痛、泡沫状の喀痰
3点：悪心・嘔吐、身体の重たい感じ

2. 湿証に用いる生薬(図2)

湿(水滞)治療の用語：水滞治療の薬能は利水、化湿、駆水(逐水)、痰飲には化痰という用語が用いられます。

利水薬の作用臓腑：脾胃、肺、膀胱、腎へ作用する薬能が考えられています。

脾胃←茯苓、人参、白朮、半夏、乾姜、黄連
肺　←麻黄、桂皮、黄耆、細辛、黄芩
膀胱←猪苓、沢瀉、滑石、木通、黄柏
腎　←猪苓、沢瀉、車前子、附子、(桂皮)

湿熱(黄疸、慢性炎症)：黄疸を調整する山梔子、黄柏、茵陳蒿などは清湿熱薬として**黄連解毒湯**、**茵陳蒿湯**に配剤されます。皮膚や呼吸器系の慢性炎症に用いる**荊芥連翹湯**や**柴胡清肝湯**にも清湿熱の薬能があります。(日本漢方ではこの病理と薬能が不十分です)

利水薬

病理産物の水を血中へ吸収し腎臓から排泄する薬能です(結果的に利尿することになります)。沢瀉、茯苓、猪苓、朮が基本的な利水薬です。

その他の利水薬

麻黄(主治喘咳水気也)、杏仁(主治胸間停水也)、防已(主治水也)、黄耆(主治肌之水也)、薏苡仁(主治浮腫也)、細辛(主治宿飲停水也)、附子(主逐水)にも利水的な薬能を認めています。

駆水薬

瀉下によって利水する大黄は駆水薬といわれます(**茵陳蒿湯**や**九味檳榔湯**)。

温めて利水

日本漢方では附子の配剤された**真武湯**、**桂枝加朮附湯**、**四逆湯**類で陰証(寒証)の水毒に対処します。

3. 水滞証と淋証(図3)

中薬学における朮の使い分け指針

蒼朮(*Atractylodes lancea*)：辛苦、温：
燥湿健脾、祛風散寒、明目；帰脾、胃、肝経
白朮(*A. macrocephala*)：苦甘、温：
健脾益気、燥湿利水、止汗、安胎；帰脾、胃経

日本の朮

昭和30年代まで日本市場の朮の基原に混乱があったため使い分けは「あいまい」でした。現在では基原は明確になりましたが、銘柄によって朮の規格が異なります。また日本で白朮としている*A.japonica*の帰属にも問題があります。

中薬学の薬能論によると蒼朮は**防已黄耆湯**、**平胃散**、**桂枝加朮附湯**に適し、白朮は**苓桂朮甘湯**、**当帰芍薬散**、**人参湯**に適するようです。『傷寒論』処方には蒼朮が適当だという文献考証もありますが、臨床上の使い分けに関しては今後の課題であり、結論に至っていません。

五苓散の構成生薬の薬能：脾胃、膀胱、腎に作用する生薬が配剤されています。

茯苓、白朮→脾胃の調整
沢瀉、猪苓→膀胱の調整
沢瀉、桂皮→腎の調整

苓桂朮甘湯と**苓姜朮甘湯**：ともに利水薬(茯苓、朮)、健脾薬(甘草)を主薬とする寒証傾向の水湿に用いる処方です。

苓桂朮甘湯は甘草－桂皮の；茯苓－朮の薬対を主軸にする補気・温経散寒剤です。

苓姜朮甘湯は寒証傾向の腰下肢の冷え症に用いられます(甘草－乾姜の薬対)。

血虚を伴う場合は**四物湯**を併用します。

五苓散

口渇、嘔気、頭痛、むくみ(二日酔い様症状)に用いる代表的な利水剤です。
アレルギー炎症性浮腫やネフローゼには小柴胡湯と併用(**柴苓湯**)、暴飲暴食には**平胃散**と併用(**胃苓湯**)されます。

苓桂朮甘湯

一過性の「立ちくらみ」や動悸に用いられます。一過性の脳虚血を甘草と桂皮が調整し、胃内停水(痰飲)を朮と茯苓で利水(化痰)すると考えられています。

猪苓湯

排尿痛、残尿感、尿路結石に用いる代表的な利水剤です。

図4　関節水腫に用いる処方群

越婢加朮湯（口渇、熱感を伴う関節痛）

石膏　麻黄　薏苡仁
大棗　甘草　杏仁
生姜　蒼朮　芍薬　桂皮　当帰
防已　黄耆

麻杏薏甘湯（関節痛、筋肉痛）

防已黄耆湯（多汗、疲労感、水太り）
変形性膝関節症
ネフローゼ

薏苡仁湯
（関節痛、筋肉痛、しびれ）
（麻杏薏甘湯より慢性期に使用）

変形性膝関節症

【体力の実証傾向】
↑ 越婢加朮湯
麻杏薏甘湯
薏苡仁湯
（疎経活血湯）
（五積散）
↓ 防已黄耆湯
【体力の虚証傾向】

関節リウマチ

越婢加朮湯（口渇、関節疼痛熱感）
薏苡仁湯（亜急性～慢性の関節腫脹痛、筋肉痛）
防已黄耆湯（多汗、疲労感、水太り）
疎経活血湯（水毒＋瘀血：冷えにより増悪する関節痛）
桂枝加朮附湯（冷え症、寒冷により増悪する疼痛）
（**越婢加朮湯**と併用される：**桂枝越婢湯**の代用）

図5　冷え症を伴う湿証に用いる処方群

当帰芍薬散

当帰、川芎　沢瀉　茯苓

桂枝加朮附湯

大棗　甘草
芍薬　生姜　蒼朮
附子
桂皮

真武湯

（生理痛に**安中散**を併用）
（食欲不振に**人参湯**を併用）
（気うつに**半夏厚朴湯**を併用）

冷え症の病理【虚実夾雑証】

【気虚（陽虚）＋水滞】
人参湯（下痢軟便）
苓姜朮甘湯（腰の冷え）
八味地黄丸（牛車腎気丸）
真武湯（下痢、めまい感）
桂枝加朮附湯（関節痛）
【血虚＋水滞】
五積散（関節・腰痛）
当帰芍薬散（貧血傾向）
当帰四逆加呉茱萸生姜湯
（腰冷痛、凍瘡、偏頭痛）

冷え症の湿証下痢

胃苓湯（寒冷刺激による下痢：**五苓散**＋**平胃散**）
人参湯（胃腸虚弱と寒冷による下痢軟便）
真武湯（顕著な冷え、疲労倦怠感、めまい感、動悸）

図6　淋証に用いる主要処方

竜胆瀉肝湯

竜胆【清熱燥湿】
黄芩　山梔子
木通　車前子
甘草
芍薬　当帰　地黄

五淋散

沢瀉　滑石
茯苓
猪苓
阿膠

猪苓湯（残尿感、尿路結石）
（抗生剤処置後に投与し残尿感や不快感を解消する）
（疼痛に**芍薬甘草湯**を併用；皮膚枯燥には**四物湯**を併用）

尿路愁訴症状の病性

【熱証傾向】
↑ **竜胆瀉肝湯**（尿道の灼熱感）
五淋散（慢性膀胱炎の第１選択剤）
猪苓湯（尿路結石の第１選択剤）
清心蓮子飲（胃腸虚弱者の尿路愁訴）
↓ **八味地黄丸**（夜間頻尿の第１選択剤）
【寒証傾向】

4. 関節水腫（図4）

防已黄耆湯：気虚（疲労感と自汗のみられる病態）の水腫と風水（関節水腫）に用いられる補気（黄耆）利水（防已、朮）剤です。変形性膝関節症の基本処方です。

防已黄耆湯
筋肉が柔らかく色白の「水太り」体質で汗が多く小便不利で膝関節や下肢に浮腫のある病態に用いられます。冷えが顕著な時は**桂枝加朮附湯**と併用されます。

異物同名生薬	
	中国の防已（*Stephania sp.*）：苦、寒：利水消腫、祛風止痛
	日本の防已（中薬の青風藤 *Sinomenium sp.*）：苦辛、平：祛風湿、通経絡、利小便

越婢加朮湯：防已黄耆湯の関連処方です。麻黄と石膏の配剤された処方で、関節水腫と患部に熱感のある場合に用いられます。

疎経活血湯：各種の利水滲湿薬と活血化瘀（川芎、当帰、桃仁、牛膝）の配剤された処方です。冷えを伴う下肢の関節痛やむくみに用いられます。

麻杏薏甘湯
急性期の（軽度の）関節痛、筋肉痛に用いる処方です。本方は経験的に「いぼ」にも用いられます。

薏苡仁湯
越婢加朮湯を慢性期にも適応できるように補益性のある薏苡仁（利湿健脾）と当帰（補血止痛）を配合した処方です。

関節リウマチ			
経過と病性	急性期（熱証傾向）	越婢加朮湯	
	↓	薏苡仁湯、防已黄耆湯	桂枝湯＋麻黄附子細辛湯【桂姜棗草黄辛附湯の代用】
	慢性期（寒証傾向）	桂枝加朮附湯、大防風湯	
病理	病理の実証（水滞、瘀血）と病理の虚証（血虚）の夾雑 活血剤の桂枝茯苓丸が有用な時期がある。疎経活血湯（水滞と瘀血に対応）		

5. 冷え症の病理と処方（図5）

気虚（陽虚）証と水滞の冷え：胃腸虚弱や加齢などによる正気（いわゆるバイタリティ）の低下した病態です。これが水滞（痰飲）を誘発して冷えが強くなりますので**人参湯、苓姜朮甘湯**や**八味地黄丸、桂枝加朮附湯、真武湯**を用います。

血虚証と水滞の冷え：血虚（貧血傾向、末梢血流不足）と水滞の虚実夾雑病態に用いるのが**当帰芍薬散**や**当帰四逆加呉茱萸生姜湯**です。**当帰芍薬散**は利水薬が配剤されている点で四物湯と相違します。

瘀血証と水滞の冷え：微小循環不全の瘀血に水滞が併発すると冷えます。活血剤の**疎経活血湯**や**桂枝茯苓丸**には利水薬が配剤されています。

桂枝加朮附湯
手足先が冷えて知覚が麻痺する関節水腫、リウマチに用いられます。桂枝湯の加味方なので感冒初期の悪寒と関節痛にも適します。本方に茯苓を加味した**桂枝加苓朮附湯**は胃腸虚弱者にも適します。

真武湯
生気が乏しく疲労倦怠感を伴う冷え症（日本漢方の陰虚証）に用います。胃部振水音（痰飲）があり、動悸、めまい感（ふらつき）、下痢に適します。悪寒の顕著な感冒にも用いられます。

当帰芍薬散
筋肉軟弱で胃腸虚弱・貧血傾向の人の冷え症（日本漢方の陰虚証）に用います。頭重感、めまい感、肩こり、生理不順、生理痛、妊娠浮腫に適します。

6. 淋証に用いる主要処方（図6）

淋証と清湿熱薬：尿道炎や膀胱炎などが湿熱の淋証とされ、滑石、木通、竜胆などの清湿熱薬が用いられます。**五淋散**や**竜胆瀉肝湯**に配剤されています。膿尿や細菌尿を認める場合は化学療法が優先し、漢方製剤は自覚症状の改善に併用されています。

虚証の淋証1：八味地黄丸（牛車腎気丸）は腎虚（夜間頻尿、疲労感、腰下肢の冷えなどの加齢による虚弱症状）の調整（補腎）を主体にした利水剤です。

虚証の淋証2：清心蓮子飲は気虚（胃腸虚弱）と陰虚（皮膚枯燥と手足のほてり）の調整（補気生津）を主体にした利水剤です。

竜胆瀉肝湯
熱証を伴う体力の実証傾向の人の生殖泌尿器系の慢性の炎症に用いられます。構成生薬の異なる同名処方があります。慢性期には柴胡を使用することが望ましいので（配剤されていない場合は）**四逆散**が併用されます。

五淋散
体力中等度の人の排尿痛、残尿感に用いる利水剤（清湿熱剤）です。

清心蓮子飲
体力の低下した人の口の渇きや排尿困難に用いられます（六味丸や八味地黄丸を用いる病態に類似し、胃腸虚弱な人に適した処方と考えられます）。